

保育者のスポーツ経験の差が幼児の運動あそび支援に与える影響について

健康スポーツマネジメントコース
5017A323-3 中村 裕

研究指導教員：中村 好男 教授

背景

近年、子どもの体力低下が社会問題になっている。国は、平成14年中央教育審議会で「スポーツや外遊びに不可欠な要素の減少」「外遊びやスポーツの重要性の軽視など国民の意識の低下」「子どもを取り巻く環境の問題」「生活が便利になるなど子どもの生活全体の変化」「就寝時刻の遅さ、朝食欠食や栄養のバランスのとれていない食事など子どもの生活習慣の乱れ」に理由があると指摘している。

柳田(2008)は、就学前、幼児期の運動経験の減少が関与している可能性があるとしている。幼児期の運動の重要性について吉武(2014)は、幼児期の運動体験はその後の心身の健康に大きな影響を及ぼす可能性が高くこの時期の身体教育は非常に重要な意味を持つと捉えられているとしている。また、加賀屋(2008)は、身体活動量を増加させることは運動能力向上に結び付くと報告している。

問題の所在

幼児はその大半の生活を保育所や幼稚園で過ごす。体力や運動能力を向上させるためには幼児の支援、援助をする保育者の存在が重要な役割を果たす。岩崎(2007)は、幼児の生活の中心は遊びであり、体を使って遊ぶ「運動あそび」を通して身体を動かす楽しさを知り、運動能力を発展させること、また集団遊びを通して友人関係を築き、ルールを守る・工夫するといった社会性や創造性などの内面的な能力を身につけることができているとしている。一方、柳田(2008)は、ただ遊ばせているだけでは子どもの運動経験に偏りが生じてくる可能性を示唆している。

幼児の良い運動経験につなげるためには保育者の運動あそび支援の意識やプログラムの構成力が大きな役割を果たすのではないか。そのためには保育者個人のスポーツ経験が遊びへのヒン

トとなり、意識の強弱が積極的な身体活動の取り組みに影響しているのではないかと考える。

研究の目的

子どもの体力低下傾向を認識した上で、保育者個人のスポーツ経験の差が、幼児に対する運動あそび支援に与える影響について調査を行い、その違いを明らかにする。

研究の方法

質問紙調査および聞き取り

「保育者のスポーツ経験の差が、幼児の運動あそび支援に与える影響」を明らかにする。

「保育者の子ども時代の戸外遊び」「中・高校生時代の部活動経験」と、「スポーツへの好意度」との違いが、保育所での幼児の運動あそび支援にどのように作用したかを実証する。

調査対象・方法と期間

・東京都近県の保育所6園に所属する現職保育士107人に質問紙を郵送で送付、107人から回答を回収した。

・調査期間：2017年7月～8月実施

さらに、調査紙回答からスポーツ経験のある保育士1名、スポーツ経験のない保育士1名を選出し、インタビューにより聞き取り調査を行った。

調査結果

・スポーツの好意度について

「スポーツは好き」20人(19%)、「まあまあ好き」42人(39%)の合計62人(58%)

「あまり好きではない」10人(9%)、「嫌い」(1.9%)合計12人(11%)であった。

・スポーツの好意度に対する分析

保育士の中学時代の部活動とスポーツの好意度についてのオッズ比11.2、 $p < 0.001$ 高校時代のオッズ比：9.3、 $p < 0.001$ であり、スポーツの経験がある保育士はスポーツに好意があることがわかった。

聞き取り調査

スポーツ経験がある保育士とない保育士の語りから差を見出すために該当する保育士2人に聞き取り調査を実施した。

質問項目

1. 保育計画に運動あそびを取り入れるか否か
2. 幼少時に遊んだ戸外遊びは支援に生かされているか（内容、頻度）
3. 自由遊び時の保育士の参加度合い
4. 子どもにとって運動は重要だと思うか

スポーツ経験の有り無し、スポーツの好意と幼児の運動あそび支援の時間や内容には差がなかった。語りの中で運動あそびの効果として、スポーツ経験ありの保育士は身体的要素以外に精神的要素や社会的要素をあげ、経験がない保育士は身体的要素をあげたので、107名の調査紙調査の自由記述の回答を分析した。結果、スポーツ経験がある保育士は精神的要素、社会的要素についての記述は経験のない保育士より高い割合を示し、反対にスポーツ経験がない保育士は身体的要素が高い割合を示した。（表1）

	(n=75)	(n=32)
	スポーツ経験あり	スポーツ経験なし
身体的要素がある	70.6%	84.3%
精神的要素がある	54.6%	43.7%
社会的要素がある	36.0%	21.8%

（表1）スポーツ経験の有無とスポーツで得られると思う要素について（%）

運動あそびは必要か否かの自由記述の主な内容

要素	スポーツ経験あり	スポーツ経験なし
身体	・運動機能向上・体力向上・丈夫な身体づくり ・身体能力の発達	・運動神経の発達・健康づくり・筋力の発達・反射能力の発達
精神	・忍耐力がつく・挑戦力が身につく・集中力がつく・行動力がつく	・ストレス発散・脳の活性化・楽しさを覚える・スポーツ嫌い回避
社会	・協調性がつく・社会性が身につく・チームワークをおぼえる	・協調性がつく・人間関係が身につく・仲間意識

質問紙調査の自由記述で得られた結果を分析

質問紙調査の自由記述からスポーツ経験がある保育士は身体的要素よりも精神的、社会的要素に効果がある記述が多く、スポーツ経験がない保育士には記述が少なかったことから、3効果についてカイ二乗検定を実施した。結果、統計的な有意な差は認められなかった。

（スポーツ経験の有無と身体的要素について）

$\chi^2=2.234$ $p=0.135$ （スポーツ経験の有無と精神的要素について） $\chi^2=1.070$ $p=0.301$ （スポーツ経験の有無と社会的要素について） $\chi^2=2.064$ $p=0.151$

考察・結論

本研究の目的は過去にスポーツ経験がある保育士とない保育士が幼児に運動あそびを支援する際、意識の違いや考え方、内容や頻度に差があるという仮説に基づき調査を行い実態を明らかにすることにあったが、運動あそびの内容や頻度では経験有る無しに関係なく差がないことがわかった。理由として、インタビューの語りから保育所保育指針に沿って保育活動を行っていると考えられる。また、運動あそびを幼児に支援する際、期待する効果として「身体的要素」「精神的要素」「社会的要素」について経験がある保育士とない保育士の違いが見出せたため質問紙の自由記述を分析した結果、経験がない保育士は身体的要素の割合が高く、精神的、社会的要素の割合が低かったことから、統計的検証を行ったが有意な差は認められなかった。しかし、明らかにスポーツ経験がある保育士が期待している精神的、社会的要素の記述が多く双方の差があることから、スポーツ経験がある保育士は部活動での経験値として忍耐力や協調性などを学んだ経験から身体的要素以外の要素を記述したと推察した。つまり、スポーツ経験がある保育士は精神的、社会的要素に期待している傾向があり経験がない保育士は身体的要素に期待する傾向があるという結論に達した。

その他

本研究の自由記述で述べられていた「忍耐力」「挑戦力」「協調性」などは非認知能力、Grit（やり抜く力）という能力の一つとして欧米を中心に注目されている。字が書ける、数がわかるなどIQで測れる認知能力とは違い、IQでは計れない内面の力として「目標に向かって頑張る力」「人と上手に関わる力」などで、文部科学省(2016)は忍耐力や自己制御、自尊心などの社会情動的スキルいわゆる非認知能力を幼児期に身につけることが大人になってから大きな差が生じるとし、今後の幼児の成長には欠かせないものとされている。幼児の運動あそびの支援においてこれら非認知能力やGritを伸ばす仕組みを今後、整える必要があると思われる。

